

新刊紹介

パースック・ポン
パイチット、クリ
ス・ベーカー共著
／北原淳・野崎明
監訳、日タイセミ
ナー訳『タイ国
近現代の経済と政
治』

原洋之介



刀水書房
2006年

私が最初にタイを訪れたのは、一九七三年一〇月の学生革命の直後であった。その後も、ほぼ毎年タイを訪問し続けた。この間のタイの政治・経済・社会の変容、それは日本の高度成長期以降に比べても、さまざまいいものであった。そしてこの間にタイで友人も多くできたが、その中でも最も親しくなったのが本書の著者たちである。まず本書の内容を、

主として「はしがき」、「結論」から私なりに引用することで紹介しよう。

今日のタイは相当な部分、過去一世紀半にわたる二つの主要な開拓運動によって創造されている。ひとつは未利用の広大な沼沢地や森林地帯における農民の農業入植、他は中国東南部からの入植者、労働者および商人の移住であった。過去二世紀にわたるタイの歴史は、植民地主義、冷戦、開発、グローバル化・シモンというアジアの地域と世界の一般的なテーマを共有してきたが、こうした開拓運動こそが、タイの歴史に地域固有の性格を与えてきた。タイの近現代史は、開拓を可能とさせたフロンティアの存在を抜きには語れないのである。

華僑移民が支配者と手を結ぶのに成功したことによって、タイの地元企業が推進する経済成長、ビジネスが支配する議会制民主主義、相対的にオープンな大衆政治への道が開かれた。ごく限られた経済計画の下で、政治的保護者としてのアメリカの役割と結びついて、これらの開拓運動の力は政治経済に強力な内的ダイナミズムをもたらした。このダイナミズムこそが、タイの近代化の主力であった。

そして、二〇世紀の最後の四半世紀になって、それまでの歴史の核にあったフロンティアは消滅した。都市経済が農村の資源を囲い込み、バインとムアン、つまり村落と都市との

の区分が不鮮明になった。また土地フロンティアの枯渇は、資源をめぐる争いを急激に高めた。それに対して農民は逃避ではなく、むしろ抗議行動を起こすようになった。同時に、国境を資本、労働、技術、アイディアのグローバル化された大きな流れに開放させることで、世界から新たなカタチでのフロンティアを導入しはじめた。

一九九〇年代にはいつて、タイ経済は一九九七年の金融・通貨危機のときに突然はじけてしまうバブルへ歩みはじめた。一九九一・九二年に引き起こされた政治的不満は、重要な憲法改正へのはすみをつけた。より強力になったバンコクの市民層の存在を背景として、一九九七年憲法はタイの政治を新しい局面へと勢いよく押し出した。しかしながら、農業はここ一〇年低迷しており、資源をめぐる対立が急増し、都市経済は一九九七年の危機によってすっかり打ちのめされた。そして経済危機は、タイ国内の企業家層にとっても、本当に世界市場にフロンティアが存在しているのかどうか、大いに疑問とされはじめた。以上が本書の内容のポイントである。

さらに「はしがき」を読みながら、本書を書いた著者たちの目論見を紹介しておきたい。初版は、一九九二年の「暗黒の五月」の政治危機にさらされながら書いた。その危機の複雑さは、タイがどれだけ変化しているか、また急激に変化しているかを

示している。その危機を理解する際に多くの外国人観察者が直面する困難そのものによって、冷戦時代の終焉以来こうした変化について要約し、解釈するための本がほとんど書かれていない。本書はその作業に取り組むための一つの試みである。「私たちの利用した資料の約三分の一は一九八八年以降刊行された著作」であることからわかるように、タイ研究もフロンティアであった。こういう事情を踏まえて、学生にとって役に立ち、熱心な一般読者にも興味がある、そして専門家に対して挑戦的な現代タイの概説書を書く。これが筆者たちの意図であった。

昨年の思いがけないクーデタに代表されるように、原本が出版されてからタイはまた激しく動いた。この辺については、著者たちが二〇〇四年に出版している『タクシン・タイにおける政治のビジネス』を一読されることを薦めておきたい。

この翻訳は、日タイ研究グループと称されている研究会に関係した五人にのぼるメンバーで分担して行われた。そして、監訳者によるタイでの近代化を巡る論争と、その中で本書の位置づけに関する的確な解説が加えられている。全体として、訳文がやや直訳的過ぎることは気がかりだが、タイ研究の現代の名著がこうして日本人に手が届きやすくなったことは大層喜ばしいことである。(はら ようのすけ／政策研究大学院大学教授)